

浄土

monthly JODO

2017 December

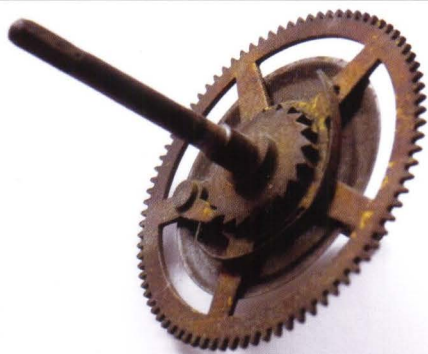
12

法然上人鑽仰会

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



直径66ミリ、軸75ミリ。左はラチェットに食い込んだ爪部分。ラチェットがある面の錆は深い。制作年、何の機械の一部だったか、ともに不明

父が鉄工所で働く職工だったせいか、鉄の工具が子どものころから好きだった。鉄工所といっても小さな町工場である。父はそこで一日旋盤で鉄を削ったり、溶接をしていた。ときどきわたしはその工場に行って、溶接の火花を遠くから眺めたり、旋盤が削る金属の屑や錆びたボルトやナットを持ち帰ったりしたものである。新品の設備などあるはずもないその町工場の工具は、ほとんどが錆びて赤茶色に沈んでいた。地面も錆びた鉄色で、わずかに雑草が生えていた。そういった子どものころの体験のせいか、錆びた鉄の塊のような工具を見ると今でも心がときめく。

錆びた釘（曲がっていればなおさら）や蝶番も好きである。それらは骨董ではなく、ただのゴミなのだが、

手に取って眺めていると、露出した時間というものが感じられて、不思議な気持ちにとらわれる。真っ白な綿を敷いたガラスのケースに入れて、飾っておきたいくらいである。歳をとってくれば否応なく、自分の身体に露出した時間を感じざるを得ないのだから、なにも鉄屑に感動することもないわけではあるが。

写真の歯車は年に二回ほど開催される「東京蚤の市」の出店のダンボール函に、無造作に詰められていたもののひとつである。大が五〇〇円、中小が三〇〇円ほどだったか。

いい感じに錆びた歯車を選んだ。錆びた釘や蝶番と違って、これなら机の上に置いてもツレアイからゴミと思われることもない。

外縁は単純な平歯車だが、内側のこぎり状の歯が刻まれたラチェットが見える。ラチェットは動作方向を一方に制限するために用いられる歯車で、そのための板バネも組み込まれている。この一方を固定された板バネの先端が押さえる爪のこぎり状の歯に引っ掛かり、歯車の動きを制御するわけである。

なかなか精密な歯車である。だがその複雑な構造のためバランスが悪く、独楽のように回して遊ぶことができないのが残念である。

浄土

2017/12月号 目次

連載	法然上人と親鸞聖人(十六)	林田康順	2
連載	江戸の川を歩く⑩	森 清鑑	8
連載	響流十方	小村正孝	16
連載小説	渡辺海旭⑧	前田和男	20
連載	マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	29
連載	誌上句会	選者=無縫庵烏鷺坊	30
編集後記			32

急告

訃報

当会理事長兼副会長（月刊浄土編集人）を
永くお勤め頂いておりました大室了暗師が、
十一月十四日ご逝去されました。
行年は九十二歳でした。

本葬儀は、十二月十八日午後一時より
増上寺慈雲閣にて執り行われます。

合掌 聖号十念（編集部）

表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙写真=鬼海弘雄

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

法然上人 と 親鸞聖人

【連載十六】

親鸞聖人が捉えた
「浄土三部経」③

林田 康順

(大正大学教授)

『教行信証』における『阿弥陀経』の位置

『観無量寿経』に引き続き、親鸞聖人による『阿弥陀経』の捉え方の肝要について概観します。親鸞聖人は『教行信証』化身土文類第六の標挙の文に次のようにお示しです。

阿弥陀経の意なり 至心回向の願 不定聚の機 難思往生。(真宗聖典二七四)

(試訳 『阿弥陀経』の説示内容は次のようにまとめられます。まず衆生が自力の思いで念仏を称えた功德によって浄土往生を遂げることを誓われた〈第二十・至心回向の願〉について明らかにし、次に自力の思いで念仏を称えている〈不定聚の機〉を説示対象とし、さらに阿弥陀仏の本願の力を疑ったことによる方便化土への往生である〈難思往生〉を述べています。)

このように親鸞聖人は、『阿弥陀経』の説示をめぐって、四十八願でいえば第二十願に

該当し、その往生人と往生を遂げる有り様について、自力念仏の者であり、方便化土への往生として捉えるのです。

続けて親鸞聖人は『同』化身土文類第六の中に『阿弥陀経』の説示について次のようにお示しです。

いま方便真門の誓願について行あり信あり。また真実あり方便あり。願とはすなはち植諸徳本の願じきしよとくほんこれなり。行とはこれに二種あり。一つには善本、二つには徳本なり。信とは、すなはち至心・回向えこう・欲生よくしやうの心これなり（二十願なり）。機について定あり散あり。往生とはこれ難思往生なんししやうこれなり。仏とはすなわち化身けしんなり。土とは、すなはち疑城胎宮ぎじやうたいくうこれなり。『観経』に准知するに、この『経』（小経）にまた顕彰けんしやう隱密いんみつの義あるべし。顕といふは、経家は一切諸行の少善を嫌貶けんへんして、善本・徳本の真門を開示し、自利の一心を励まして難思の往生を勧む。ここをもつて『経』（同）には「多善根・多功德・多福德因縁」と説き、釈（法事讃・下）には「九品ともに回まして不退を得よ」といへり。あるいは「念仏して西方に往くに過ぎたるは無し、三念五念に至るまで仏来迎したまふ」といへり。これはこれこの『経』（小経）の顕の義を示すなり。これすなはち真門のなかの方便なり。（真宗聖典三九七）

（試訳）いま方便真門の誓願についてみてみると、これに行と信があります。また真実と方便があります。この願には植諸徳本の願（第二十願）が該当します。その行に二通りあります。一つは善行で、二つは徳行です。信は真実の心・回向の心・願往生の心です。行を修める者に定心の者と散心の者があります。その往生は難思往生なんししやうとい、その仏は化身であり、その浄土は疑城胎宮です。『観無量寿経』に準じて考えて

みると、『阿弥陀経』にも顕説と隱彰の二義があります。その顕説とは、釈尊は念仏以外のあらゆる行を修めてもわずかな功德しか積めないとしてこれを退け、善行・徳行の真門を説示し、自力の一心を起こすことを奨励して、難思往生を勧められました。そのため、『阿弥陀経』には「念仏は多くの善根、多くの功德、多くの福德を具えた行である」と説かれ、善導大師の『法事讃』には「九品の者は念仏を回向することによって不退転の境地を得よ」あるいは「念仏を称えて西方極樂浄土に往生する教えにまさるものはない。わずか三遍や五遍の念仏を称えた者に至るまで、阿弥陀仏は来迎して浄土に導いてくださる」と説かれているのです。こうした説示は『阿弥陀経』の顕説を示しており、真門の中の方便にあたるのです。）

やはり親鸞聖人は、『阿弥陀経』に説示される念仏は自力の思いで称える念仏であって、念仏行者を来迎する阿弥陀仏を化身であり、「真門のなかの方便」と位置づけています。

親鸞聖人にとっての多善根

親鸞聖人が「多善根・多功德・多福德因縁」などと言及される『阿弥陀経』の一節は次の通りです。

舍利弗、^{ぜんにんし}少善根福德の因縁を以て、彼の国に生ずることを得べからず。舍利弗、もし善男子・善女人^{ぜんなんし}あつて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、もしは一日、もしは二日、もしは三日、もしは四日、もしは五日、もしは六日、もしは七日、一心不乱なれば、その人命終の時に臨んで、阿弥陀仏、諸々の聖衆^{しやうしゆ}とともに、現にその前にまします。この人終わる時、心顛倒^{てんとう}せずして、すなわち阿弥陀仏の極樂国土に往生

することを得。（浄土宗聖典一・三一八）

（試訳）舍利弗よ、念仏以外のわずかな功德しかない行を修めただけでは、極楽浄土に往生することはできない。舍利弗よ、男性であれ、女性であれ、善良な人々が、阿弥陀仏について説かれているのを聞いて浄土往生の願いを起こし、念仏を称えることが、あるいは一日、あるいは二日、あるいは三日、あるいは四日、あるいは五日、あるいは六日、あるいは七日、一心不乱であれば、その人の命終に臨んで、阿弥陀仏が、極楽の多くの聖衆と共に、その人の前に来て迎えて下さる。その人は、命終わる時、心が動揺することなく、阿弥陀仏の極楽浄土に速やかに往生を遂げるのである。）

この一節をめぐって法然上人は『選択集』第一三章段において、〈念仏…諸行^{りやうしやうどうもん}…多善根…少善根〉と示しています。そもそも法然上人は、中国から渡来した『龍舒浄土文』所収の二十一文字からなる「念仏多善根の文」によって念仏が多善根であることを確信されました。法然上人は、この文に巡り会えたことを「正しく念仏を指して多善根と云う文、実に大切なり」（昭法全二五四）と語っておられるように、法然上人の教学体系の構築にあたり、「念仏多善根の文」は実に大切な意義を有しているのです。（紙面の都合上、その詳細については、拙稿「法然上人における勝劣・大小・多少相對三義の成立について―「念仏多善根の文」渡来の意義―」（『宮林昭彦教授古稀記念論文集・仏教思想の受容と展開』所収）などを参照して下さい。）しかし、それも親鸞聖人によれば、究極の教えに導くための方便に過ぎないというのです。

親鸞聖人にとつての来迎——来迎たのむことなし——

さらに親鸞聖人は、前述した『阿弥陀経』の一節を受けて、「三念五念に至るまで仏来迎したまふ」と述べられた善導大師の『法事讃』の文を引用されます。周知のように法然上人は、この『法事讃』の文を受けて『一紙小消息』の中で次のように述べられます。

諸仏のなかに弥陀に帰したてまつるは三念五念にいたるまでみづから来迎し給う故なり。（昭法全四九九）

（試訳） 無数の仏の中から阿弥陀仏におすがりする理由は、三遍とか五遍といったわずかな念仏しか称えなかつた者であっても、臨終には阿弥陀仏自らが来迎して下さるからです。）

法然上人によれば、阿弥陀仏による来迎は、散り乱れる心をもつた凡夫にとつて何よりもありがたいことであり、阿弥陀仏による来迎があるからこそ凡夫は心静かに臨終を迎えることができるとお示しです。（紙面の都合上、その詳細については、拙稿「法然における来迎思想の展開」〔『鳳翔学叢』七〕などを参照して下さい。）

しかし、こうした『阿弥陀経』や『法事讃』に言及される阿弥陀仏の来迎について親鸞聖人は次のようにお示しになるのです。

来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑに。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし、いまだ真実の信心をえざるがゆゑなり。また十悪・五逆の罪人の、はじめて善知識にあうて、すすめらるるときにいふことなり。真実信心の行人は、摂取不捨のゆゑに、正定聚しやうていしゆのくらひに住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむこ

となし。信心の定まるとき、往生また定まるなり。来迎の儀式をまたず。（『親鸞聖人御消息』真宗聖典七三五）

（試訳）阿弥陀仏の来迎は、さまざまな行を修めて浄土往生を目指す人についていうものであり、それは、自力の行者に限るものです。臨終の時に往生が定まるなどということは、こうした諸行往生の人についていうものであり、それは、いまだ真実の信心を得ていないからです。また十悪や五逆の罪を犯した人が、臨終の時にはじめて善知識に出会い、念仏を勧められた時にいうことなのです。真実の信心を得た人は、阿弥陀仏が撰め取って決してお見捨てにならないので、この娑婆世界にありながら不退転の境地に至るのです。そのため臨終の時まで待つ必要ありませんし、来迎をたよりにする必要ありません。信心が定まる時に往生も定まるのです。そのため来迎のための作法など必要ないのです。）

いかがでしょうか。親鸞聖人によれば、『阿弥陀経』に説示される阿弥陀仏の来迎は自力の行者に用意されたものであって、究極の教えに導くための方便に過ぎないというのです。『観無量寿経』同様、師法然上人と弟子親鸞聖人の理解が大きく異なることにお気づきでしょうか。

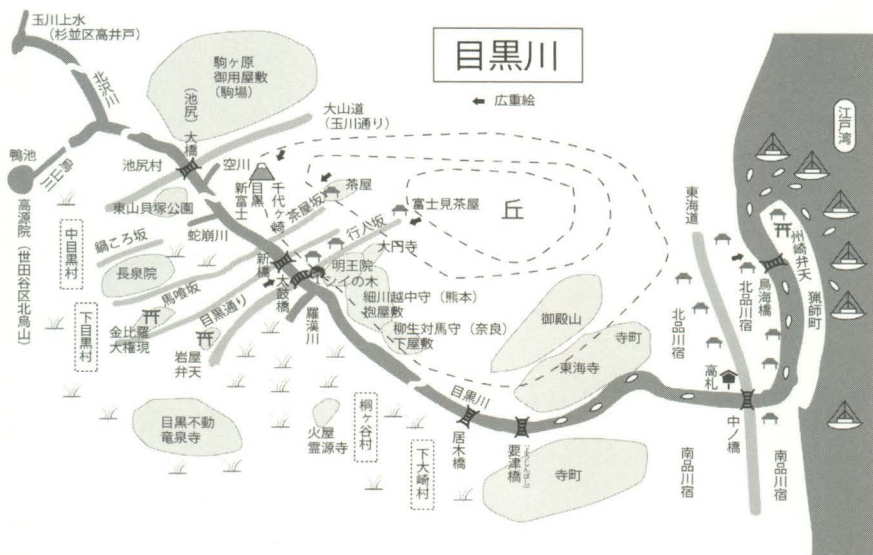
（続く）

江戸の川 を歩く

第十七回

江戸ウォーカ―

森清鑑



目黒川

目黒川は、太古の昔、海水が内地にまで入り込んでいた時代の名残である。江戸の南側では、東西に流れる川として古川に次いで重要な運搬河川であった。江戸時代、東海道は、海縁をはしっている。目黒川の河口は、海に沿って品川と州崎を縫うように南に下る。海側の州崎は防波堤の役目を果たしている。そして、品川宿を分断して流れを西に変える。上は、北品川宿下は、南品川宿である。その流れは、常に穏やかで、船の停泊、荷上げの最適地。そこで、品物を運ぶ川、つまり品川の地名を生んだと云われる。

目黒川は、高源院（世田谷区烏山）の池を水源とし、幾つかの支流を加え、品川に流れ込む。そのため、満潮時には、海水が逆流して目黒の方まで上がることになる。そこで今回は、下流から上流に向かって動こう。

品川州崎

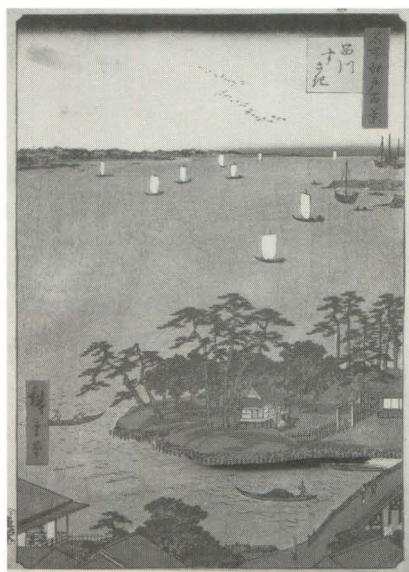
江戸湾には、沢山の帆掛け船が浮かび、細長く突き出た島状の州崎（埋め立て地）、その先端に州崎弁天

社（水の神弁財天を祭る）は在る。ここが目黒川の河口で、弁天社の向かいには、北品川宿の家屋が密集。二階の部屋（最も有名な妓楼、土蔵相模）から客人が眼前の江戸湾の景色に見とれている。眼下には、荷を積んだ船が海に向かっていて、その右には、宿場と繋ぐ太鼓橋、鳥海橋が描かれており、弁天社にお参りする人の姿がある。空には雁であろうか、野鳥の群れが列をなして飛んでいる。海沿いに面した品川の宿が、江戸の人々にとってどんなに憩いの場所であったかを物語っている。この風景こそが、目黒川が江戸湾に流れ込む現場なのである。

鳥海橋を潜る。左は、州崎で漁師町、右側は北品川宿の家屋が海に向かって並んでいる。東海道に架かる中之橋から流れは西に転じる。橋の麓に高札が立ち、目黒川は北品川宿と南品川宿を分けている。当時、品川宿は街道筋に沿って宿屋、料理屋、妓楼が数百軒、軒を並べていた。船がさかに行き交い、宿場町に物資を運んでいる。

寺町、御殿山

宿場町が終わると、川の両岸には、お寺の屋根が林立する様が見える。寺町の出現。北側には、一六三九年、徳川家光が沢庵宗彭たくあんそうほうを招聘して創建された名利、東海寺がある。その北側には、桜、フジ、紅葉で名高い御殿山。流れはやや北上する。この辺りから、大崎村北品川宿の田や畑が多くなる。そして桐ヶ谷村。畑の中の一画に火屋とあり霊源寺が管轄。これが江戸時



◆広重：「品川すさき」目黒川の河口。中央に州崎弁天社。左下土蔵相模、右下鳥海橋。江戸湾には、多数の船が浮かぶ。絶景。

代の火葬場、今の桐ヶ谷斎場である。

明王院、太鼓橋、行人坂

目黒川の左岸からは台地が迫り上がっており、三千四百坪の柳生対馬守下屋敷に続き、二万三千坪に及ぶ肥後熊本藩細川越中守の抱え屋敷（現・杉野女子大）。隣接して山手七福神の明王院（現・雅叙園）。右岸を見ると、広大な目黒不動の南縁を通り、流れ込んでいく羅漢川が見える。明王院は、明治の廃仏毀釈で廃院となったが、当時は大伽藍であった。そして太鼓橋に出る。この橋は珍しい石造りで、一七六九年（明和六年）に完成したという。橋を造った人は諸説あるが、八百屋お七の恋人、吉三郎という伝説が残されている。彼は、明王院で修行し、西運上人となる。西運は、鈴ヶ森で火炙りの刑に処されたお七の菩提を弔うために、明王院から浅草観音まで鐘を叩き、お念仏を唱えながら往復すること（約四十キロ）、二十七年半をかけて一万日の行を積む。成就のきっかけは、お七が夢枕に立ち成仏を告げたので、お七地藏尊を建てたという（今は大円寺に）。行の途中、多くの人達から浄財を頂き、

それを元手に目の前の行人坂に敷石道を造る、あるいは石の大鼓橋を架けるなどの社会奉仕事業を行っている。明王院の一郭にあった大円寺（五百羅漢で有名）には、今も橋の一石が残されている。

太鼓橋の下を幾分蛇行しながら流れる目黒川的情景は絵になる。現代も橋の上からこの風景を飽かず眺めている人が多いが、満潮時には潮が逆流してくる。両岸は、桜の名所で、桜祭りでは大変な賑わいとなる。目黒のサンマという古典落語で、将軍が鷹狩りに来て、



◆広重「目黒太鼓橋夕日の岡」雪景色。橋の左にシイの木。夕日の岡。

サンマに舌鼓を打ち、「サンマは目黒に限る」という落ちがあるが、これは実話と思われる。江戸湾から獲りたての新鮮な魚を船で運ぶことぐらい、日常であつたに相違ない。

行人坂

太鼓橋から明王院沿いに登る急坂が行人坂で、その界限は、江戸時代大変な賑わいを見せた。逆に行けば岩屋弁天で有名な蟠竜寺にぶつかるとし、その南には、三代家光が鷹狩りの際に必ず寄つた目黒不動竜泉寺の広大な境内がある。江戸っ子は、正月七日は、目黒不動参詣をならいにしていたので、太鼓橋と目黒川から迫り上がる台地の風景は別格で遊興も兼ね、江戸の名所となつた。行人坂の上からは富士がよく見え、富士見の名所（富士見茶屋）。そういうわけで、広重も雪旦も太鼓橋界限の情景を絵にしている。広重は、雪が降りしきる太鼓橋の光景を描く。渡る人も少なく、簀を被つて歩く人の姿もある。皆、明王院、行人坂に向かって歩いている。渡ると右側の麓に柵に囲まれた中、雪を被つたシイの木が描かれている。この木は今も健



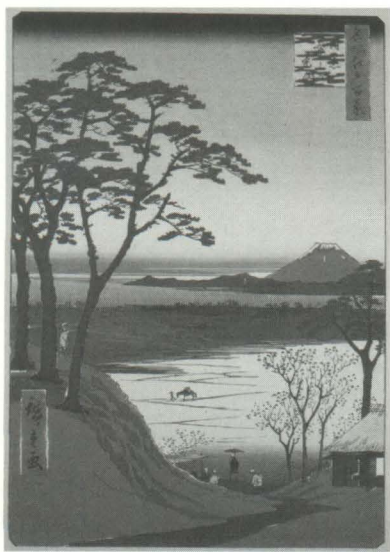
◆広重「目黒行人坂之図」行人坂を登り切ったところから富士を見る。右、富士見茶屋。

在である。目黒川の蛇行の様や東側の迫り上がった丘の雪景色が手に取るように分かる。雪旦が描く太鼓橋は大勢の人が渡っている。また、広重の目黒行人坂の図では、登り切った処に富士見茶屋があり、正面に大きな富士が描かれている。このように目黒川の東は迫り上がった丘で、西側一帯は平地の田園風景が展開する。一帯の丘の上から見る富士を含めた景色は絶景で、江戸の人々は、夕日の岡と呼んで親しんだ。

爺々が茶屋

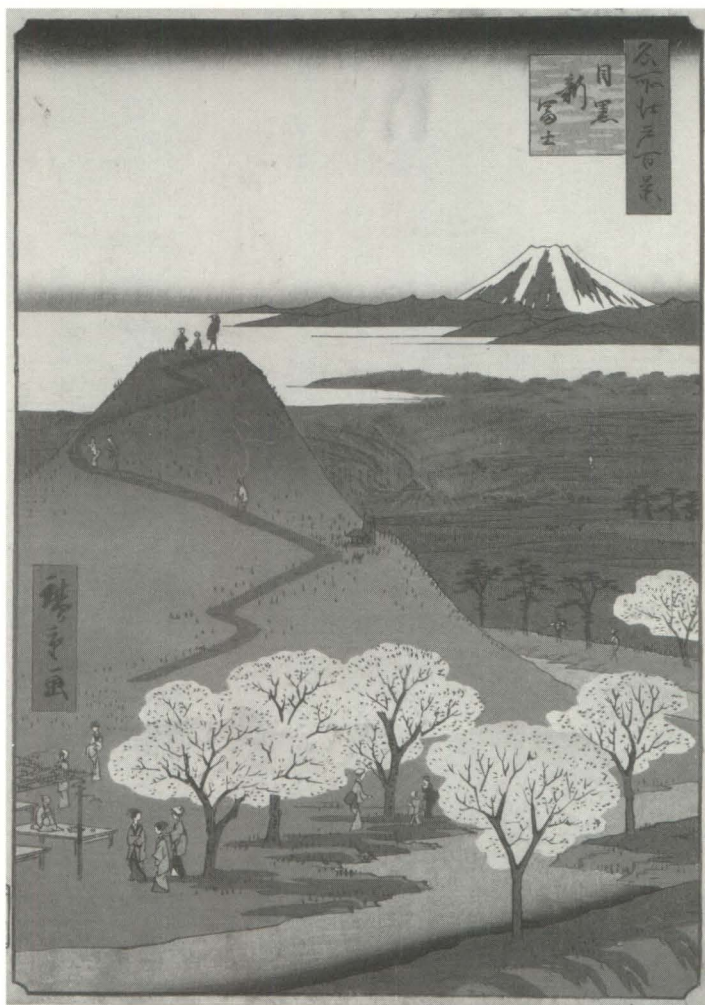
太鼓橋を潜りさらに上流に向かう。直ぐに新橋（今の目黒通りに架かる。右に上があれば権の助坂）。川の西一帯は、実り豊かな田畑で下目黒村、中目黒村となる。そして田道橋。この橋は地域の農民がことさら愛用した橋で、東に行くと若干の田畑を縫い、すぐ山道となる。上に一軒の茶屋がある。「爺々が茶屋」。三代將軍家光は、鷹狩りの際にここに立ち寄り、茶屋の主人で百姓をしていた彦四郎の素朴な人柄に惚れ込み「爺、爺」と声をかけた。そのためについた名。サンマも献上したのかもしれない。十代將軍家治は、彦四

郎の子孫が出した団子や田楽を大層喜んで食したという。この茶屋に至る坂道が茶屋坂（今の目黒清掃工場脇が上がった、防衛省技術研究所の処）である。ここから見る富士の景色がすばらしく、広重は、「目黒爺々が茶屋」で描いている。この辺りは千代ヶ崎といい、江戸っ子の観光の名所であった。上から下に広がる田園を見下ろす。百姓が馬を引いている。小高い丘がある。その上に広い長泉院の境内があった。境内の南を登る坂が「馬喰坂」で、その北側が「鍋ころ坂」であ



◆広重「目黒爺々が茶屋」右下茶屋。中央畑。小高い丘がある。右上丹沢と富士。

◆広重「目黒新富士」 目黒川沿いの花見。富士信仰の新富士の上から本物の富士を拝む。



る。この絵の遠方には、丹沢の山並みとその背後に富士山が格調高く描かれている。

皂樹橋、目黒新富士

さらに上流に行くと、皂樹橋さいかちばし（駒沢通りに架かる）がある。そこから斜め右へ。別所坂を登っていくと富士信仰の目黒新富士があり、三田用水が通る檜が崎。この辺りに、鎌倉時代武蔵の豪族、目黒氏の居城があったという。ここでも、広重は目黒川沿いに咲く、桜の花見を楽しむ人、人工の新富士の頂上に立って、本物の富士を眺める人の姿を絵にしている。

大橋から源流へ

皂樹橋を潜ると、左側から蛇崩川が流れ込んでいる。この川は、弦巻に端を発し、下馬を通って合流している。（今の中目黒駅東側で目黒川に注ぐ）。この川の名は、蛇のようにくねって流れているから、あるいは、両岸を深く浸食して壁が崩れるところから、土地の人が砂崩川と呼んでいたところからついた名と云う（今は緑道化）。さらに田圃を縫って進むと次が宿山橋。

ここからは田畑を潤す幾筋もの網状の流れとなり、再び一本化して大橋に到達する。大橋の上を通る道が、江戸の大山道（大山詣）で今の玉川通り。橋の左側一帯は池尻村で、地名にちなんで、今は、池尻大橋。橋の手前左に縄文公園がある（現・東山三丁目）。縦穴住居。そして看板。その絵には、縄文人の生活が描かれ、目黒川は崖下の海で、遠くで火山が噴火している様が描かれている。ここで貝塚が発見された。すなわち、縄文期、海水がここまで押し寄せていたのである。大橋を潜ると、目黒川は広大な駒ヶ原ご用屋敷（駒場）沿いに左に流れ、やがて北沢川と烏山川に分かれる（池尻四丁目）。北沢川は上を流れ玉川上水まで行く（高井戸）。烏山川は、下を流れ、若林を通り、高源院に辿り着く。すなわち、高源院鴨池（現・北烏山）が目黒川の水源である。これらの川は、今はほとんど緑道化している。

まことではないものを、まことであると見なし、

まことであるものを、まことではないと見なす人々は、
あやまった思いにとらわれて、ついに真実^{まこと}に達しない。

〔ダンマパダ〕11偈、12偈 岩波文庫『ブッダの 真理の言葉 感興のことば』より

まことであるものを、まことであると知り、

まことではないものを、まことではないと見なす人は、

正しい思いにしたがつて、ついに真実に達する。

心の眼

はや師走。本誌本年一月号の小欄に、新年を迎えまた歳を一つとってしまつた、と、あきらめともボヤキともいえないようなくだりを書いた記憶がある。で、今号では書きはしないけれども、また歳を重ねてしまふ、と、あきらめともボヤキともいえない思いでパソコンのキーを叩き始めている。

視力が年々、否、そんな悠長な単位ではない、月ごと、ヘタをすると週ごと、日ごとに変化しているのを実感する。「変化」としたのは、筆者の場合、一概に「悪くなった」わけでないからにほかならない。

近くが見辛くなつてきている。ご多分にもれない、老眼だ。編集という仕事柄、日々、原稿とにらめっこしているが、「ぱ」か「ば」か、「こ」なのか「き」なのか、書体やポイント（大きさ）によつてはかなり怪しくなる。スマホを持つ手は肘の開きが大きくなつてきた。まるで「えん××」とかいうサブリメントのコマーシャルみたいじゃないか。そのうち腕をまっすぐ伸ばしても足らなくなるかも。

当然眼鏡が必要だ。もともと近視で何十年もお世話になっているが、ふだん掛けているものより二段階くらい弱いものを使えば老眼鏡の役目を果たしてくれるのだが、今度はそれを掛けたまま立ち歩いたりすると、ちよつと離れたと

ころにあるものもボヤケて怖い。かといって、しょっちゅう眼鏡を掛け変えるのも面倒だから、ついついそのままにいるようになる。

しかしまあ、体というものは大したもの、そんな不精をしていたら、その眼鏡でも遠くもハッキリ見てやろうと目のピント機能が意地を出してフル稼働するのか、最近、ふだんの近視用を掛けているときの視力が上がったように感じる。以前にも増してハッキリクッキリ見えるようになってきているのだ。これには驚いた。夜のクルマの運転が前より楽になった。ちよつと嬉しい。が、老眼は相変わらず進んでいる。「ば」と「ば」の区別はさらにつきにくくなっている。こっちは以前にも増して、哀しい。

などと、年を追うごとに度を増している己の自虐さに呆れ、肩をすぼめているとき、『ダンマパダ』の二つの偈が頭に浮かんだ。

こんな言い草をしてはお釈迦さまに叱られそうだが、まったく非の打ちようのないお論しである。二つ目は、理論上そうであっても筆者には到底無理そうなので（真実には達せられそうもないので）証明はできかねるが、一つ目については、わたしこそその生き証人です、ときっぱり申し上げられる（また自虐的になってきた）。

「まことではないものを、まことであると見なし、まことであるものを、まことではないと見なす」とは、仏教的に別な言い方をすれば「無明」であろうし、「愚痴」ということにもなる。まさに、（真実という）明らかさに気づかず、または明らかに観る眼を持たず、愚かで痴^{おろ}かなのである。「痴」という字が、「知（る）」が「やまいだれ」に囲まれているというのも、「言い得て妙」である。そういえば「痴」の旧字は「癡」ではないか。病的に疑いの眼で物事を観ようとするのが人間の性なのだよと教えてくれているようだ。こうした教示をしてくれたお釈迦さまはもちろんのこと、インドの言葉で記されていた経典をこれら示唆深い漢字で表した古の訳経僧たちにも最大の感謝と敬意を払わなければならないまい。

近視のために、離れたところのもの（先々のこと）がちゃんと見据えられない。老眼のために、近くのもの（現実）が正しく認識できない――。

これは私の「目」という部位だけの問題ではない。心の眼もまた、そうだ。肉体の視力は眼鏡で矯正できても、残念ながら心の視力はそう簡単にはいかない。偏った見方の矯正法をこそ、お釈迦さまは説いてくださっているはずなのだが……。今年一年をよく振り返り、新しい年に臨もうと思う。

（小村 正孝）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月

を求めて

前田和男

第八十三回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

いざ、シベリア鉄道で懐かしの故国へ②



旧友は満蒙の「間諜」か？

渡辺海旭の十年ぶりの帰国は、海旭の決意のほどを確認したドイツ駐劄日本大使の珍田捨巳の次の「条件付き言質」をもって最終決着をみた。

「重ねていうが君の借金をふくめてカネの心配はいらん。ついては頼みがある。シベリア鉄道に乗り、ハルビンで途中下車、ぜひ北条太洋にあつてほしい。君とは旧知らしいね」

この珍田の言質の根拠について、読者諸賢から疑義の声が上がるかもしれないので、あらかじめ補足をおこう。

海旭が帰国することになるのは一年前の明治四十二年三月五日、海旭は「新仏教」の同人である畏友の高島米峰に送った手紙の中で、共通の友人である北条太洋にこう呼びかけている。

「帰りにシベリアに是非よる筈だから、奉天

あたりで二晩か三晩飲み明かして積もる話でもしようかい」(『壺月全集』下巻、五百八十六頁) さらに、その二か月後の同年五月二十五日の手紙では、米峰にこう念を押している。

「太洋兄の所には是非厄介になることに極めて置く。呑気な僕だから、ことによると、五日か六日食潰して、コンソン閣下を驚かせ奉るかもしれない。随分と困った人物だ」(『壺月全集』下巻、五百八十九頁)

北条太洋は外務省書記生として、南米、フィ



リピン勤務を経て、旧満州は奉天、現在の中国遼寧省瀋陽に隣接する新民



屯の日本総領事館の分館主任であった。海旭との機縁は、海旭が留学前に参加した宗派を超えた若手の勉強会「経緯会」のメンバーだったことによる。

なお、珍田が「ハルビンで途中下車」と言ったのは、ハルビンがシベリア鉄道の重要分岐点となっており、北条の赴任地に近い奉天からもさほど遠くないからだが、その経緯は後ほど詳しく述べる。それよりも、読者の関心は、満州地区の大都市・奉天ならいざ知らず、その近郷の小都市の一介の外交官が、はたして位人臣を極めつつある大使閣下と「深い関

係」にあるものかどうかだろう。

それには、北条の任地である新民屯の地政学的位置が大いに関係していたのではないか。明治三十八年、ロシアが日本との戦争で敗れることで同地が「中立地帯」となるや、日本軍が進駐占領。やがてそれが「満州国」建国の足がかりになるのだが、同地に新設された領事館分館が北条の赴任先であった（なお同地は昭和七年、「満州国」が成立すると同国奉天省新民県となる）。すなわち、北条は、日本が利権を求める満蒙の最前線で、外交官というより「間諜」として活躍していたのではなからうか。それは、北条から発せられた次のような「外交文書」からも窺うことができる。「公第二七号 大正二年二月二十七日 在新民府分館主任 北條太洋 外務大臣男爵 牧野伸顯殿 大民屯事情報告ノ件 小官曩ニ当県管内 大民屯ニ旅行致候処同地ニ関スル状況別紙ノ通りニ候此段及報告候敬具」

「機密公信第六号 大正三年十月十六日 在

琿春副領事 北條太洋 外務大臣男爵 加藤高明殿 琿春県知事ノ態度ニ関スル件 (琿春県知事は) 性質温順ニシテ表面我ニ好意ヲ有スルガ如ク見ユルハ支那官憲一般ノ常態ニ有之。(略) 排日鮮人ノ居住往来スル者尠カラサル場所ヲ以テ随テ朝鮮人ヲ利用シテ日露ノ状況ヲ探知シ：(以下略)

このように北条は機密性の高い「報告」を外交トップに大量に送り続け、大正三年には琿春副領事に、そして大正五年には東蒙古の熱河特別行政区赤峯に新設された初代領事に任じられる。ちなみに琿春は旧「満州」地区にあつて朝鮮族が多い地域で、朝鮮独立運動の拠点であつたが、後の大正九年、日本領事館が襲撃されたのを理由に独立運動家を大量虐殺する「琿春事件」が起きる。また熱河は後に日本が「満州」から「北支」へと侵略の食指を伸ばす「起点」となる。こうしたことから、北条は外交戦略上きわめて重要な役割を担わされていたとみてよい。後に現役を

退いた北条は『熱河』なる著書を著すが、荒木貞夫陸軍大臣、広田弘毅外務大臣、張作霖などの歴々が題字と序文を寄せていることから、それを窺い知ることができ。おそらく珍田も出版時に存命であつたなら、そこに名前を連ねていたはずである。

したがつて、珍田捨已と北条太洋は、地位的には伯爵閣下と出先の一外務省職員という疎遠な関係に見えながらも、実は「親密な関係」にあり、だからこそ珍田は海旭に向かつて、

「(北条太洋は) 君とは旧知らしいね」

と言うほどの、特殊な情報をもっていたのではなからうか。

帰国をめぐる記述が皆無の謎

かくして、海旭はシベリア鉄道経由で帰国の途次、旧「満州」のハルビンか奉天で北条太洋と何かしら重要な会談をもったことは、否定できないどころか、大いにありうるので

はないかと思われる。

しかし、筆者の妄想を刺激してやまないのは、それだけではない。

そもそもヨーロッパと極東をつなぐ鉄路、シベリア鉄道が全線開通するのは明治三十六年だが、日本人がそれを安心して使えるようになるのは、日露戦争後の明治三十九年以降、海旭が帰国する四年前のことである。

もし萩原雲来と共に帰国していれば、留学時と同じように、船でスエズ運河を経由、はるばるインド洋を超えて、二か月ほどを費やさなければならぬ。それがシベリア鉄道を使えば、その全行程は四分の一の二週間ほどに短縮。おまけに旅費も安くすむ。これは世界的な大事件であり、海旭の人生にとっても忘れがたい出来事であったはずである。何事にも好奇心が強く筆まめの海旭がこんな「未知の体験」を放っておくはずがない。

留学の往路にあつては、途中寄港した香港、新嘉坡（シンガポール）、錫蘭（セイロン、

現スリランカ）などの風物について「紀行文」を友人たちに書き送っている（『壺月全集』下巻、四〇七―四一一頁）。にもかかわらず、帰路についてはエピソードどころか、どのような経路と交通手段によつて十余年ぶりに故国の土を踏んだのかさえも記していない。

いや、それどころか、高島米峰への手紙で「もし帰れるならばシベリア經由で」と記した後に帰国を決意したと思われるが、その経緯は一切語られていない。

これはいったいどうしたことか？ どう考えても不自然であり、不可解である。

それから、もう一つ、帰国にまつわる大いなる謎がある。それは、帰国に大きな橋渡し役を果たした人物、珍田捨巳に関わる記述が、海旭自身の書簡や日記には一切ないことである。

本連載七十三回でも紹介したが、私の調べた限り、海旭と珍田の関係について記されているのは、後に共に『大正新脩大藏經』を編むことになる宗教学の泰斗、高楠順次郎の以

下の回想のみである。

「君（海旭のこと、筆者注）の洋行は随分長い間で、十三年間（高楠の誤りで正しくは十一年間、同上）も居つた。帰れと云つても帰らない。旅費を送れば、平気で滞在して還らない。後には浄土宗務所も閉口して、旅費も滞在費も送らない。君の下宿費は幾月経つても支払はれない。やかましく催促すると、そんなに催促するなら自殺すると云ふ。それでは最早催促しないと云ふことになつた。結局、それでは治まらない。宗務所は、遂に、時の駐独珍田大使（編者云大使は渡辺先生外国語の師）に頼んで、君を送り還へしてもらふこととなつた。これは不可抗力と思つたか、遂に帰朝した（小林大蔵編著『壺月和尚の面影』一九三三年、三九頁）

帰国をめぐるこの大いなる不自然、不可解を、いったいどう考えたらいのだろうか？
一つありうるとしたら、海旭は、珍田と北条との関係をふくむ帰国の経緯について書簡

や日記や覚書に記していたが、関東大震災で焼失してしまつたのではないか。しかし、「帰国のくんだり」だけが失われたというのはどう考えても不自然である。だったら、海旭自身がある意図をもってあえて秘したか、あるいは弟子たちがある忖度をもって「遺稿集」である『壺月全集』に収めなかつたのか？ だとしたら、その理由とはなにか？

その後の海旭の人生のネガティブな部分——という言葉が不穏当なら、その後の海旭の人生にとって「隠密裏の活動」の契機となる「何か」があつたからではないか？

筆者の妄想の赴くところ、珍田が暗に指示した北条某との再会とそこで交わされた会話にその謎を解き明かす鍵があるように思われてならない。

したがって、ここからは前にもまして筆者の妄想が入ることをお許し願つて、今一度、時計の針を、本稿冒頭の珍田の「条件付き言質」、「ついでには頼みがある。シベリア鉄道に

乗り、ハルビンで途中下車、ぜひ北条太平洋にあつてほしい」に戻して、話を続けることにしよう。

やはり帰路も欧州航路だった!?

海旭としては、留学中にこしらえてしまった借金を清算してもらえらる上に帰国の旅費までもつてくれる「対価」であれば、珍田から出された「帰国の条件」など、お安いものゝと思つて了解したが、それがその後の海旭の人生にとって大きな意味をもつことになるのは露ほどにも考えなかつたはずである。

海旭は、ベルリン郊外の珍田邸を辞すと、その足でいったんストラスブルクへと戻つた。

さつそくロイマン教授に事情を説明、教授と共に進めていた研究を大急ぎに急いで仕上げると、身辺の整理をして、なんとか帰国の準備が整つたのは、年が明けた明治四十三年の春であつた。

海旭の死後まとめられた『壺月全集』の巻

末には、弟子によるものと思われる「伝記」が収められているが、そこに以下の記述を見つければ、わが推理もなかなかだと一人悦にいった。

「明治四十三年春、愈々帰朝の準備を完了す。顧みるストラスブルクの春風秋雨十有二年、慈教春の日にも似たる恩師ロイマン教授等、ここにあり、アルサスの秀麗、ラインの長江、いまにして更らに親しき風色なり。然も攻学半途にして慈母の訃音、師僧の遷化を聴く。人こそ知らぬ傷心断腸の想出なり。故国に帰るの日、蓋し氏の胸中万感真に無量のものありしを想ふべし」(『壺月全集』下巻、六百三頁)

ところが、それに続く次の一行で、筆者の頭はホワイトアウトした。

「同年三月廿二日、神戸着の伊豫丸にて無事帰国す」

これを信じれば、海旭は往路同様に欧州航路で帰国していたということになるのではないか！ 思わぬ蹟きに、一瞬わが妄想力を逞しくしすぎたことを後悔。ここは、じたばたし

でもはじまらない、読者諸賢に土下座をして潔く坊主懺悔をする覚悟をかためるべく、もう一度、読み直してみ、「待てよ」と思い直した。欧州航路で帰国したとすると、日程に無理がありすぎる。ドイツのストラスブルクから鉄路でフランス国境を超えてマルセイユへ、そこで出国と乗船手続きをして、欧州航路で神戸へ向かうとすると、都合五十日はかかる。前掲の「伝記」のとおり「帰国準備が整ったのが明治四十三年春」だとすると、いくらなんでも同年の三月二十二日に日本に帰着するには無理で、遅くとも一月末にはドイツの古城の町を出立していなければならない。疑念を解くべく他に海旭の帰国の記述はないかと、あたつてみた。すると「浄土教報」(明治四十三年三月二十八日、八百九十七号)の第二面「渡辺海旭君を迎ふ」と題する記事の末尾に「三月二十三日に君が神戸に安着の報を聞いて」とあった。

一日のズレはあるが、どうやら明治四十三

年三月二十二日か二十三日には、海旭は航路で神戸に帰着していたことは間違いないらしい。となると、「伝記」にある「春」は無理やり前倒してして「初春」か「新春」と解すべきなのだろうか。

しかし、ここまで妄想を逞しくして「シベリア鉄道経由説」を唱えてきた筆者としては、易々と旗を降ろすわけにはいかない。なんとか、「欧州航路帰国説」を覆せないものか？

そこで必死の思いで「反証」の手がかりを探したところ、あったのである。それは、「伝記」に記されている海旭が乗船していたとされる「伊豫丸」である。調べてみると、「伊豫丸」は日本郵船の外国航路船。『日本郵船百年史』と『同五十年史』によると、「伊豫丸」は明治三十四年からシアトル・横浜間の北米航路に就航、日露戦争で陸軍に人馬輸送用に徴発されるも、同三十七年に北米航路に復帰。明治四十四年三月に欧州航路に一時転用されているが、それは海旭の帰国の一年後である。

となると、どうも「伝記」の船名の記述は虚偽の可能性が高い。

さらに、もっとシンプルな「反証」に思いあたった。そもそも「欧州航路」は起点も終点も横浜である。後一日乗船していれば、海旭は、寓居の西光寺に近く、友人知人も大勢待ち受けている横浜に着くの、また恐らく多くの荷物を抱えていただろうに、なぜわざわざ神戸で下船して、東海道本線に乗り換えなければならないのか？ この矛盾は、海旭が神戸を終着とする航路に乗船していたことの証明にこそなれ、欧州航路には乗船していなかった「反証」になるのではなからうか。

ならばと、当時神戸を終着とする航路を調べると、実に興味深いことが判明した。海旭の帰国の五年前、大阪商船によって大連―神戸間の定期航路が就航。そして、大連は、北条の赴任地に近い奉天、さらにはシベリア鉄道の分岐点であるハルビンを経由してベルリン、ストラスブルクへと鉄路でつながってい

るではないか。

これで、海旭は珍田捨巳の要請に従ってシベリア鉄道で帰国、その途次で北条と重要な語らいを持ったというわが推理は、危ういところで却下を免れた。やれやれである。

それでも筆者の調査に瑕疵があつて、万が一、海旭が欧州航路で帰国していたとしたら、その時の「弁明」もあらかじめ開陳しておく。それは、帰国の日程が決定し、北条に連絡を入れたところたまたまその時期は長期出張で上海か香港へ逗留しているという、ならば急遽、欧州航路に切り替え、二人は寄港先の上海か香港で久闊を叙したというものである。

いずれにせよ、前掲した二回の書簡からして、帰路の行程がなんであれ、海旭は北条と再会を果たしたことに間違いはないだろう。

さて、そこではどのような会話が交わされたのか？ わが妄想力がいいよ刺激されたところで、残念ながら紙幅が尽きた。続きは次号のお楽しみとしよう。

(つづく)

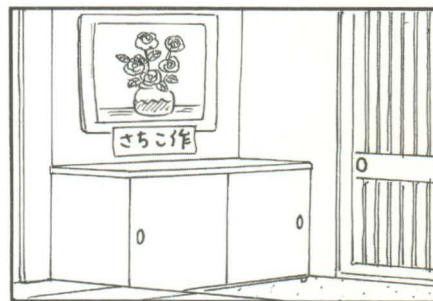
さっちゃんね

146 かい目

かまち♡ひろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



浄土誌上句会

〈特選〉

犬の目に犬の目葉今朝の秋

●目

内藤 隼人

人間の目葉とは違う犬用の目葉がある。我

が家にも遺伝性の白内障のトイプードルがいる。獣医さんから高価な目葉を処方されているが効き目はあまりないようである。今朝の秋とは立秋。ぼつりと落す目葉に季感がある。

〈佳作〉

象の目の皺に潜みし九月かな

工藤 掉

東京の空を映して秋刀魚の目

笠井亜紀絵

目いっぱい食べておかわり乗こはん

藤井 智哉

●黒

〈特選〉

黒澤のやうな野分の吹き抜けり

小林麻衣子

黒澤明の映画『用心棒』や『椿三十郎』を

思い出した。黒澤映画には風が似合う。黒澤のやうな、とは省略のしすぎのようである。存外の効果をあげている。吹き抜ける風に浪人の着物が揺れる。真剣を抜く気迫が伝わる。

選者 = 無縫庵烏鷺坊

〔佳作〕 一列の黒衣過ぎゆき葉鶏頭

伊藤 恵一

羊羹の黒ずつしりと十三夜

仁科美音子

黒人霊歌ゆつくりと這う霧の街

桜田 多聞

●自由題

〔特選〕

かたまつて二百十日のドロップス

今田 昭之

懐かしい缶入りのドロップス。長く放置しておくと、くっ付きあつてひとかたまりになつてしまふ。蓋から取り出せなくなつて悲しい気分になる。二百十日という季語が効いていて、なにやら台風の湿気も感じられる。

〔佳作〕 砂場から木の校舎へと秋の声

鐘を撞く少年僧や秋夕べ

今西 祐次
道下 恵美

訃報あり台風ひとつ迷走す

和田美美子

締切・二〇一八年二月二十五日 発表・『浄土』二〇一八年四月号

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。 ●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内月刊『浄土』誌上句会係

浄土誌上句会
お知らせ
兼題
与
瀬
自由題

編集後記

寒風があまりに強い年の暮れ 岱潤

編集仲間からも「どうしてあなたの後記はいつも批判的なんだ」と言われてしまいうくらい、今年も嫌な「ユース」が多かったように思える。そこで今年みんなが喜んだことを思い出してみたのだが、将棋で十五歳で二十九連勝した藤井聡太君のことやフィギュアスケートで世界最高点を出した羽生結弦さんのこと、それに上野動物園でパンダのシャンシャンが誕生したくらいしか思い出せなかった。後はテロやきな臭い昨今の情勢に身が震えるばかりだ。

最近も九人もの人を殺して猟奇的に解

体する異常な事件が発覚し、その呼び寄せたものがSNSの自殺サイトと聴いて二度驚いてしまった。そして容疑者から「本当は誰一人本気で死ぬ気などなかったと思う」という話を聞き、容疑者への憤りを抑えられない。

近くの人、親、兄弟、友人、教師などに心の悩みを打ち明けることが出来ない人が多いことを、私も電話相談をしていて最近とみに感じる。

この間も街頭相談で、「何でも話して下さい。お線香の上げ方などの質問でもいいですよ」の呼びかけに、明るく応じてくれたご婦人が、三十分程話をするうちに、実は深刻な家族の問題に悩んでい

たケースがあった。本当は心の奥底にしまい込んだことを吐露したいと思っっている人が多いのだろう。

身内や、友人にも話せないことを聴いてもらえること、それが本来の菩提寺の住職の役目かもしれない。
(長)

編集チーフ 長谷川岱潤
編集スタッフ 斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

浄土

八十三巻十一月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十九年十一月二十日
発行 平成二十九年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 長谷川岱潤

印刷所 株式会社 晩印刷
〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇三六
振替 〇〇一八・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 価額:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は価額に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

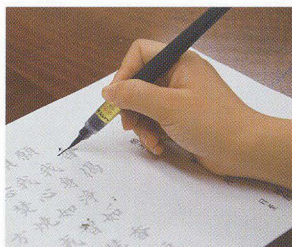
《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。